

18. 東洋文化研究所

- I 東洋文化研究所の研究目的と特徴 18- 2
- II 「研究の水準」の分析・判定 18- 5
 - 分析項目 I 研究活動の状況 18- 5
 - 分析項目 II 研究成果の状況 18-24
- III 「質の向上度」の分析 18-26

I 東洋文化研究所の研究目的と特徴

1. 東京大学東洋文化研究所は、1941（昭和16）年に「東洋文化に関する総合的研究」を行うために本学に附置された研究所であり、アジアに関する人文学・社会科学の国際的ハブ拠点として世界の研究者をつなぎ、文献研究とフィールド研究、古典研究と現代社会研究という多角的な研究視点と手法をもって、アジアに関する高度な総合的研究を行うとともに、新しい研究領域を開拓することを目的とする。本研究目的と本学第2期中期目標に基づき、下記のような活動目標を定めた（資料18-1）。

＜資料18-1＞第2期「東京大学中期目標」と関連する本研究所の活動目標

〔第2期中期目標（一部抜粋）〕

2 研究に関する目標

（1）研究水準及び研究の成果等に関する目標

① 総合研究大学として、人文学・社会科学から自然科学に至るまで多様な分野で世界最高水準の研究を実施する。

（2）研究実施体制等に関する目標

① 研究の多様性を堅持しつつ、適正かつ機動的な教員配置に努め、研究環境の整備を推進する。

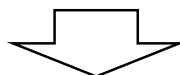
3 その他の目標

（1）社会との連携や社会貢献に関する目標

② 社会に開かれた大学として、大学の知に対する社会的ニーズに応えるとともに、その普及・浸透に貢献する。

（2）国際化に関する目標

① 徹底した大学改革と教育研究の国際化を全学的に推進し、国際協力関係を醸成して、我が国の世界的存在感を高め、ひいては国際競争力を強化するとともに、魅力溢れるトップレベルの教育研究を行い、人類社会に貢献する。



〔上記本学中期目標に対応する本研究所の活動目標〕

1. 「東洋文化に関する総合的研究」を行う研究所として、アジアに関する人文学・社会科学の多様な分野で世界最高水準の研究を実施する。

2. アジア研究の多様性を堅持しつつ、適正かつ機動的な教員配置に努め、アジア研究環境の整備を推進する。

3. 社会に開かれた研究所として、アジアの知に対する社会的ニーズに応えるとともに、その普及・浸透に貢献する。

4. 徹底した研究所改革と研究の国際化を全所的に推進し、国際協力関係を醸成して、我が国のアジア研究の世界的存在感を高め、ひいては国際競争力を強化するとともに、魅力溢れるトップレベルの研究を行い、人類社会に貢献する。

2. 本研究所は、アジア研究の国際的ハブ拠点として世界の研究者のネットワークを構築し（資料18-2）、それを通じた研究プロジェクトを展開し、さらにアジア研究に資する多様な文献資料・情報データを収集し、それを全世界の利用に供する点が、その特徴となっている。

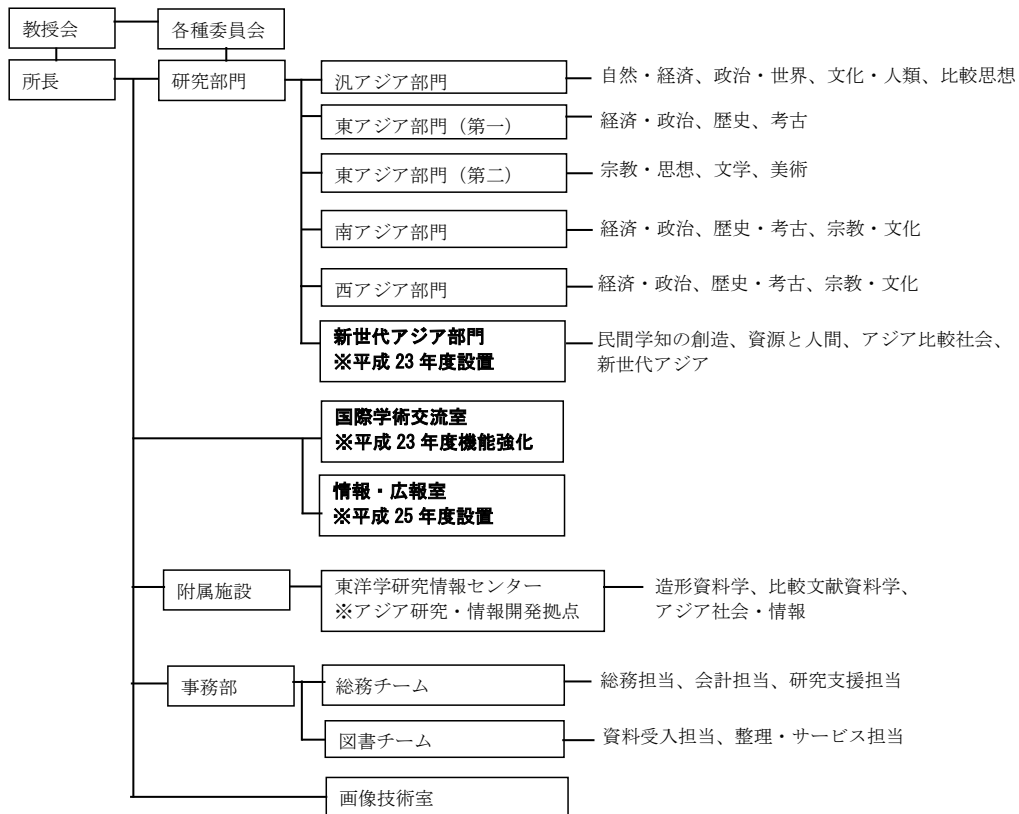
東京大学東洋文化研究所

東アジア（第一、第二）、南アジア、西アジア、汎アジア、新世代アジアの研究部門と、国際プロジェクトの運営支援を行う国際学術交流室、その成果を発信する情報・広報室の5部門2室の研究体制を敷いている。また附属施設である東洋学研究情報センター（共同利用・共同研究拠点）やアジア研究専門図書室を配置し、国内外研究者の利用に供している（資料 18-3）。さらに、日本学術振興会特別研究員等の若手研究者育成や、大学・大学院教育へ積極的に参画することにより、本学の機能強化に大きく貢献している（資料 18-4）。

＜資料 18-2＞東洋文化研究所の研究地域と国際的ハブ拠点イメージ図



＜資料 18-3＞東洋文化研究所の組織図



<資料 18-4>若手研究者の育成、大学・大学院教育への参画

(若手研究者の育成)

(単位：人)

	平成 22年 度	平成 23年 度	平成 24年 度	平成 25年 度	平成 26年 度	平成 27年 度	合計
学振特別研究員	15	17	11	12	9	15	79
外国人特別研究員	4	2	1	3	2	7	19
合 計	19	19	12	15	11	22	98

(大学・大学院教育への参画)

高度研究者養成の一環として学内の大学院教育に積極的に関わり、人文社会系研究科、法政政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、農学生命科学研究科、新領域創成科学研究科の6研究科及び公共政策学教育部並びに学際情報学府に協力講座・流動講座を出し、研究所の全教授・准教授（約30名）が約70コマ前後の授業を毎年担当している。更に「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)」とも連携して延べ39名が授業担当教員として参画している。平成26年度からは部局横断型プログラム「国際総合日本学教育プログラム(GJS)」の立上げに寄与し、2名の教員が授業担当の一角を担っている。また全学対象の授業として「全学自由研究ゼミナール」において延べ11名が授業を開講した。更に平成24年度から始まった「教養学部英語コース(PEAK)」においては延べ12名が授業を担当し、同年に開始された「大学院博士課程教育リーディングプログラム」においては延べ3名の教員がプログラム代表者を務めるなど、本学の教育研究に対し積極的に関与している。

このほか社会人教育の一環として設置されている「東京大学エグゼクティブマネジメントプログラム(EMP)」にも平成20年開始当初から教員を派遣し、延べ4名がこれを担当している。

それぞれの授業においてはフィールドワークの方法や知見、世論調査分析の手法、文献の解釈技法やテキストから新たに析出する意味世界等について、それぞれの教員の専門領域での最先端の知見を教育に反映している。

(出典：機関別認証評価の自己評価書)

[想定する関係者とその期待]

本研究所の関係者は第一に国内外の人文・社会科学のアジア研究者であり、アジア研究の国際的ハブ拠点として研究者ネットワークを構築し、それを通じて優れた研究成果を上げるとともに、新しい研究領域と視角を創成し、また研究資料を系統的に蓄積し公開することが期待されている。同時に政策立案者、国際協力事業関係者、図書館・博物館・美術館関係者、その他アジア各地で実務に携わっている人々、またアジアの社会・文化に関心をもつ人々から、アジア理解に資する情報発信を期待されている。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

(1) 組織・制度の国際化の状況

本研究所は、アジア研究の国際的ハブ拠点としての機能を充実させ、研究の国際競争力を強化し、世界レベルの国際共同プロジェクトを活性化するために組織・制度を改革した。平成 23 年度に新世代アジア研究部門を新設した(資料 18-3 P18-3)。同部門の新規採用教員は国際公募とし(3名採用)、平成 24 年度より世界的に著名な海外研究者を招へいする客員教授ポストを同部門に配置した(資料 18-5)。また平成 23 年度より国際学術交流室を増員し(計 5 名)、外国人教員を増加させることにより(平成 21 年度の第 1 期中期目標期間終了時点〔以下「第 1 期末」〕2 名、外国人教員比率約 5%→平成 28 年 3 月時点 5 名、約 14%、資料 18-6)、国際的な研究体制を強化した。その結果、次のように国際的研究が活性化した。

<資料 18-5>新世代アジア研究部門の世界的に著名な客員教授招へいリスト

○氏 名: Charney Michael Walter

所属機関: ロンドン大学東洋アフリカ研究学院・Reader

雇用期間: 平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

研究テーマ: 植民地期東南アジア農村部における鉄道の役割

○氏 名: Elman Benjamin Abraham

所属機関: プリンストン大学東アジア学部・教授

雇用期間: 平成 26 年 7 月 1 日～平成 27 年 1 月 31 日

研究テーマ: 東アジアにおける中国明清文化史

○氏 名: 葛 兆光

所属機関: 中国復旦大学文史研究院・教授

雇用期間: 平成 27 年 11 月 1 日～平成 28 年 1 月 10 日

研究テーマ: 近代日本東洋学の中国への影響

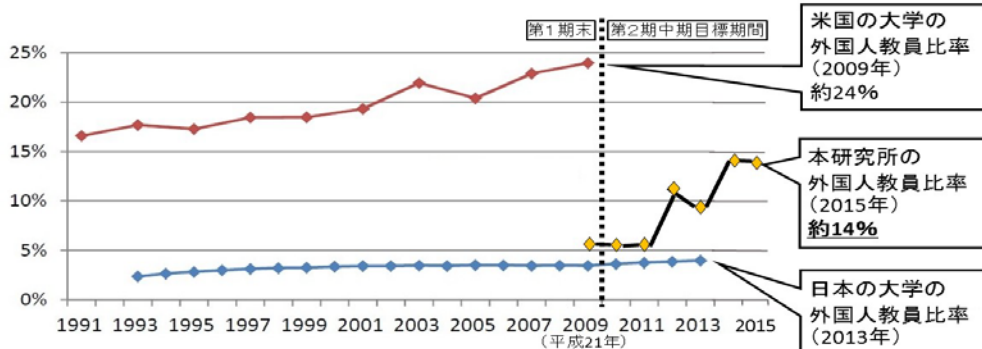
○氏 名: Zupanov Ines

所属機関: フランス社会科学高等研究院/フランス国立科学研究センター共同附属南アジア研究センター上級研究員・所長

雇用期間: 平成 28 年 2 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

研究テーマ: 南アジアにおけるカトリックミッションの社会文化史

<資料 18-6>本研究所の外国人教員比率



出典: 文部科学省「学校基本調査」、
OECD「SCIENCE AND ENGINEERING INDICATORS」
(http://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kokusaitenkai/1kai/1_kokusai_sankou4-2_7.pdfより一部転載、本資料のために加筆)

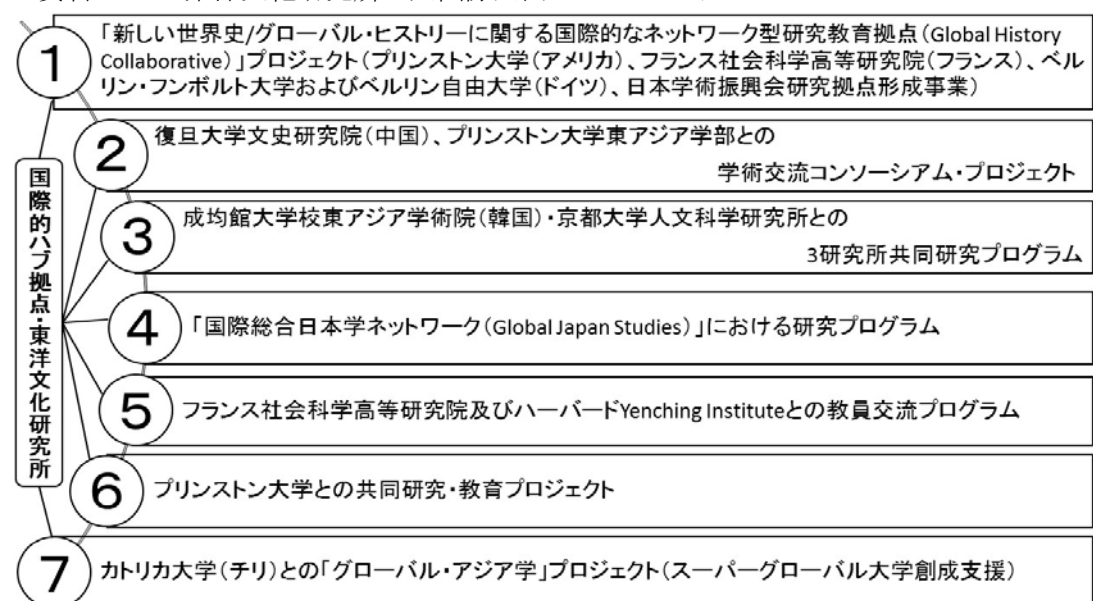
(2) 国際的研究の推進状況

第2期中期目標期間（以下「第2期」）には、海外有力研究機関と交流協定を更新・新規締結し（第1期末11件→第2期17件、資料18-7、18-20 P18-19）、連携強化によって国際共同プロジェクトを大きく増加、発展させた（第1期末2件→第2期7件、資料18-8、18-20）。それにより国際シンポジウム等の研究集会開催や、研究者・学生の国際交流を促進し、世界的視野で多彩な研究を活性化させた（資料18-9）。本研究所が世界の中で果たす国際的ハブ拠点としての重要な役割は世界的に認知され、第2期には海外43カ国、総計506人（第1期293人）の外国人研究員が本研究所で研究活動に従事した（資料18-10）。また国際学術雑誌 *International Journal of Asian Studies* (Cambridge U.P.) を編集・刊行することにより、アジアから世界に向けた研究発信の中心拠点として重要な役割を果たすなど（資料18-15）、国際的研究を推進した。

<資料18-7> 第2期に更新・新規締結された交流協定一覧

国名	協定締結先	協定形態	協定締結年度等
中国	復旦大学	全学協定・幹事部局	1991-
	北京大学歴史学系	その他協定	2010-
	香港大学	全学協定・関係部局	2013-
台湾	中央研究院社会科学研究所	部局協定・幹事部局	2010-
シンガポール	シンガポール国立大学	全学協定・幹事部局	2006-
インドネシア	インドネシア大学	全学協定・関係部局	2005-
ブルネイ	ブルネイ・ダルサーラム大学人文・社会科学部	部局協定・幹事部局	2005-
韓国	延世大学校	全学協定・関係部局	1998-
トルコ	イスタンブール工科大学	全学協定・関係部局	2012-
イラン	テヘラン大学	全学協定・関係部局	1997-
エジプト	カイロ大学	全学協定・関係部局	1998-
フランス	フランス高等研究院	部局協定・幹事部局	2005-
	社会科学高等研究院 [EHESS]	全学協定・関係部局	2006-
	コレージュ・ド・フランス	全学協定・関係部局	2012-
イタリア	ナポリ東洋大学	部局協定・幹事部局	2012-
カナダ	マギル大学	全学協定・関係部局	2014-
チリ	チリ・カトリック大学	全学協定・関係部局	1996-

<資料18-8> 東洋文化研究所7大国際共同プロジェクト



<資料 18-9> 東洋文化研究所 7 大国際共同プロジェクトの具体的な活動状況

〔1. 新しい世界史/グローバルヒストリーに関する国際的なネットワーク型研究教育拠点(Global History Collaborative)プロジェクト (平成26年度～)〕

(学術研究集会等の開催)

	開催日	開催場所	種別	学術集会名	講演者
1	平成27年9月9日	東京大学	シンポジウム	「グローバルヒストリーの可能性」フォーラム	
2	平成26年4月25日	東京大学	セミナー	2014第1回GHCセミナー: Encountering the 'Non-European' and Defining 'Europeanness'	Jean-Frédéric Schaub, Directeur d'Etudes (フランス社会科学高等研究院)
3	平成26年7月4日	東京大学	セミナー	第1回GHC大学院学生セミナー	Qingyuan Lei, PhD student (Princeton University)、Elijah Greenstein, PhD student (Princeton University)
4	平成26年12月12日	東京大学	セミナー	2014第2回GHCセミナー: A Reconsideration about the Reasons for the Success of Opium in China in the XIXth Century	Xavier Paulès准教授 (フランス社会科学高等研究院)
5	平成27年2月20日	東京大学	セミナー	2014第3回GHCセミナー: A Shared Modernity: Writing Meiji History in a Global Perspective	Aleksandra Kobiljski氏 (フランス社会科学高等研究院)
6	平成27年5月25日	東京大学	セミナー	2015第1回GHCセミナー: フランスにおけるグローバルヒストリー	Alessandro Stanziani教授 (フランス社会科学高等研究院)
7	平成27年7月13日	東京大学	セミナー	2015第2回GHCセミナー: Soviet Fashion Industry during the Cold War Period: Constraints of State Socialism and Foreign Influence	Larissa Zakharova准教授 (フランス社会科学高等研究院)
8	平成27年7月21日	東京大学	セミナー	2015第3回GHCセミナー: ・Telegraph Connecting or Sharing the World? Tool of Communication as Means of Space Conquest (Europe, Russia, Middle East and Far East, 1870-1920s) ・On the Transnational Destruction of Cities: What Japan and the U.S. Learned from the Bombing of Britain and Germany in World War II	Larissa Zakharova准教授 (フランス社会科学高等研究院) Sheldon Garon教授 (プリンストン大学)
9	平成28年2月18日	東京大学	セミナー	Ines ZUPANOV 客員教授着任研究会: Religious Plurality? Portuguese Discovery of the Antique Indian Christian (16th c)	Ines ZUPANOV上級研究員・所長 (フランス社会科学高等研究院)
10	平成26年6月14日 -15日	東京大学	ワークショップ	GHCワークショップ	
11	平成26年10月22日 -23日	プリンストン大学	ワークショップ	GHCワークショップ	
12	平成26年11月8日	東京大学	ワークショップ	若手研究者報告会	
13	平成26年12月3日 -7日	ベルリン・フンボルト大学	ワークショップ	GHCワークショップ	
14	平成27年7月12日	法政大学	ワークショップ	GHC共催ワークショップ "Street life: comparing the workings of urban space across the globe"	
15	平成27年10月5日	ベルリン自由大学	ワークショップ	グローバルヒストリーにおけるミュージアム	
16	平成27年11月4日 -6日	フランス社会科学高等研究院	ワークショップ	GHC共同研究セミナー	
17	平成26年10月25日	東京大学	研究会	糸、布、衣の循環史会議	

東京大学東洋文化研究所 分析項目 I

18	平成27年1月11日	長崎港松が枝国際ターミナル	研究会	ベルリン報告会 (Berlin Workshop Review)	
19	平成27年1月25日	国立民族博物館	研究会	世界の中のアフリカ史	
20	平成27年7月31日 -8月1日	東京大学	研究会	糸・布・衣の循環史研究会	
21	平成27年9月2日	東京大学	研究会	Alessandro Stanziani先生の書評会	
22	平成27年9月7日 -12日	東京大学	サマースクール	第1回GHCサマースクール	参加学生数32名 ※東京大学、プリンストン大学、フランス社会科学高等研究院、ベルリン・フンボルト大学、ベルリン自由大学の各拠点機関他から参加

〔2. 復旦大学文史研究院・プリンストン大学東アジア学部との学術交流コンソーシアム・プロジェクト (平成22年度～)〕

(学術研究会等開催)

	開催日	開催場所	種別	学術集会名	講演者
1	平成23年12月19日 -20日	東京大学	シンポジウム	第1回シンポジウム：世界史/グローバル ヒストリーの文脈における地域史：文化 史における事例研究	
2	平成24年12月17日 -18日	復旦大学	シンポジウム	第2回シンポジウム：世界史/グローバ ル・ヒストリーにおける東アジア	
3	平成25年12月16日 -17日	プリン ストン大学	シンポジウム	第3回シンポジウム：せめぎあう「世界 史」—中国、日本、アメリカの視点から	
4	平成26年12月15日 -16日	東京大学	シンポジウム	第4回シンポジウム：宗教、文学と画像	
5	平成27年12月14日 -15日	復旦大学	シンポジウム	第5回シンポジウム：東アジア文化交 流史の中の文学と画像	
6	平成22年11月11日	東京大学	セミナー	『初渡集』に記された、日本使節に対 する明朝の接待制度	朱莉麗助理研究員 (復旦大学文史研 究院)
7	平成23年3月4日	東京大学	セミナー	“中国”とは何処か？	葛兆光教授 (復旦大学文史研究院/院 長)
8	平成23年6月6日	東京大学	セミナー	Rethinking of the Role of China and Japan in the Early Modern World: The Great Reversal]	Benjamin Elman教授 (プリンストン 大学東アジア研究学部/学部長)
9	平成23年9月8日	復旦大学	セミナー	《阿含経》中の新元素：与巴利文本対応 関係関係の新発見	馬場紀寿准教授 (東京大学東洋文化 研究所)
10	平成23年11月30日	復旦大学	セミナー	先秦時代家族史研究的若干問題と展望	小寺敦准教授 (東京大学東洋文化研 究所)
11	平成24年1月12日	東京大学	セミナー	董少新氏、朱溢氏 (復旦大学文史研究 院) をお迎えして	董少新副教授 (復旦大学文史研究 院)、朱溢副教授 (復旦大学文史研 究院)
12	平成24年9月26日	復旦大学	セミナー	追求精神的自由：从《教师日记》读丰子 恺	大野公賀特任准教授 (東京大学東洋 文化研究所)
13	平成24年10月25日	東京大学	セミナー	復旦大学文史研究院の李星明教授および 孫英剛副教授による講演	李星明教授 (復旦大学文史研究 院)、 孫英剛副教授 (復旦大学文史研究 院)

東京大学東洋文化研究所 分析項目 I

14	平成25年11月28日	東京大学	セミナー	劉震先生（復旦大学文史研究院）をお迎えして	劉震副教授（復旦大学文史研究院）
15	平成26年1月30日	東京大学	セミナー	鄧菲先生（復旦大学文史研究院）をお迎えして	鄧菲副教授（復旦大学文史研究院）
16	平成26年3月6日	復旦大学	セミナー	通往帝国之路的货币—日本黄金単本位制的确立（1873-1897）	Michael Schiltz准教授（東京大学東洋文化研究所）
17	平成26年4月2日	復旦大学	セミナー	元代遺民画家の心象風景—龚开《中山出游图卷》	板倉聖哲教授（東京大学東洋文化研究所）
18	平成26年11月19日	復旦大学	セミナー	从“教化”到“教育”、“宗教”—从“教”看日本的近代化	鐘以江准教授（東京大学東洋文化研究所）
19	平成26年12月1日	復旦大学	セミナー	新地方史—重新审视微观史学（micro-history）	菅豊教授（東京大学東洋文化研究所）
20	平成27年1月8日	東京大学	セミナー	張佳先生、段志強先生（復旦大学文史研究院）をお迎えして	張佳助理研究員（復旦大学文史研究院）、段志強助理研究員（復旦大学文史研究院）
21	平成27年7月9日	東京大学	セミナー	許全勝先生、王鑫磊先生（復旦大学文史研究院）をお迎えして	許全勝副研究員（復旦大学文史研究院）、王鑫磊助理研究員（復旦大学文史研究院）
22	平成27年12月2日	復旦大学	セミナー	北宋三館秘閣与东亚的文物交流	塚本磨充准教授（東京大学東洋文化研究所）
23	平成28年1月7日	復旦大学	セミナー	世界史 / 全球史与历史学家的立足点	羽田正教授（東京大学東洋文化研究所）
24	平成24年6月24日 -7月2日	復旦大学	サマースクール	アジアの芸術、宗教と歴史研究	参加学生数30名以上 ※参加大学：プリンストン、復旦、ハーバード、コロンビア、ニューヨーク、オックスフォード他）
25	平成26年6月20日 -6月28日	復旦大学	サマースクール	アジアの芸術、宗教と歴史研究	参加学生数30名以上 ※参加大学：東京、プリンストン、復旦、ハーバード、イエール、エジンバラ、成均館他）
26	平成27年6月24日 -7月3日	復旦大学	サマースクール	アジアの芸術、宗教と歴史研究	参加学生数40名 ※参加大学：東京、プリンストン、復旦、広島、イエール、ハイデルベルク、ソウル、延世他）

（教員の交流）

派遣	平成23年度	復旦大学：2名
	平成24年度	復旦大学：1名
	平成25年度	復旦大学：2名
	平成26年度	復旦大学：2名
	平成27年度	復旦大学：2名
受入	平成22年度	復旦大学：2名 プリンストン大学：1名
	平成23年度	復旦大学：2名
	平成24年度	復旦大学：2名
	平成25年度	復旦大学：2名
	平成26年度	復旦大学：2名
	平成27年度	復旦大学：2名

〔3. 成均館大学校東アジア学術院・京大大学人文科学研究soとの3研究所共同研究プログラム（平成22年度～）〕

（学術研究会等so開催）

	開催日	開催場所	種別	学術集会名
1	平成23年1月28日	京都大学	シンポジウム	（第1回）東アジアにおける『知』の流通—近代を中心—
2	平成24年1月27日	成均館大学校	シンポジウム	（第2回）東アジアの近代
3	平成25年1月25日	東京大学	シンポジウム	（第3回）東アジアの『記憶』
4	平成26年1月24日	京都大学	シンポジウム	（第4回）東アジアから世界史を見る/考える
5	平成27年1月23日	成均館大学校	シンポジウム	（第5回）東アジアを思惟する—共通・差異、関係—
6	平成28年1月22日	東京大学	シンポジウム	（第6回）アジアの戦争

〔4. 国際総合日本学ネットワーク (Global Japan Studies) における研究プログラム（平成26年度～）〕

（学術研究会等so開催）

	開催日	開催場所	種別	学術集会名	講演者
1	平成26年3月7日	東京大学		国際総合日本学ネットワーク キックオフ会合	
2	平成26年6月5日	東京大学	講演会	（第1回講演会）日本史から“普遍”を考える—“忘れ得ぬ他者”概念によるナショナリズム理解の試み	三谷博教授（東京大学総合文化研究科）
3	平成26年10月17日	東京大学	講演会	（第2回講演会）日本におけるロシア文学受容—そのいくつかの特徴について	沼野充義教授（京大大学人文社会系研究科）
4	平成27年1月14日	東京大学	講演会	（第3回講演会）English East India Company in Japan and its place within Nanban Studies/南蛮文化研究におけるイギリス東インド会so役割の再検討	Timon Screech教授（SOAS, University of London）
5	平成27年1月23日	東京大学	講演会	（第4回講演会）Changing Attitudes Toward Japanese Modernity	Peter Nosco 教授（University of British Columbia/Visiting Professor at International Christian University）
6	平成27年1月23日	東京大学	講演会	（第5回講演会）Pleasure and Pain of an Indigenous Psychologist: A personal history of struggle in international academia	山口勸教授（京大大学人文社会系研究科）
7	平成27年3月9日	東京大学	講演会	（第6回講演会）ネットワークとしてのアジア グローバリゼーションと地域研究	ブラセンジット・ドゥアラ教授（シンガポール国立大学アジア研究所所長）
8	平成27年5月21日	東京大学	講演会	（第7回講演会）Flying with Madame Butterfly: Early Japan Airlines Advertising in the U.S. and Hong Kong	Yoshiko Nakano, Associate Professor (The University of Hong Kong)
9	平成27年7月30日	東京大学	講演会	（第8回講演会）「個人 or 「分人」？」	平野啓一郎氏（作家）
10	平成27年10月15日	東京大学	講演会	（第9回講演会）Area and the Regime of Separation: For the Japanese Studies to Come	酒井直樹教授（コーネル大学比較文学とアジア研究）
11	平成27年11月26日	東京大学	講演会	（第10回講演会）The Infrastructure of the Gods: Izumo in Prehistory	リチャード・トランス教授（オハイオ州立大学東アジア言語文学研究科）
12	平成28年3月25日	東京大学	講演会	（第11回講演会）True Words, True Sounds: Towards a Discontinuous Epistemology in Japanese History	James Ketelaar教授（History, East Asian Languages and Civilizations, and the Divinity School, University of Chicago）

東京大学東洋文化研究所 分析項目 I

13	平成26年7月10日	東京大学	セミナー	(第1回セミナー) Gender and Literati Art in 19th-Century Japan	若松由理香訪問研究員(東京大学東洋文化研究所)
14	平成26年7月24日	東京大学	セミナー	(第2回セミナー) 盗賊たちの栄誉—『自来也説話』におけるテキストの革命	ケヴィン・ムルホランド訪問研究員(ミシガン大学博士候補生/東京大学東洋文化研究所)
15	平成26年10月23日	東京大学	セミナー	(第3回セミナー) 矢代幸雄と美術史における場の問題	Mia M. Mochizuki教授(New York University Abu Dhabi / Institute of Fine Arts, New York)
16	平成26年12月11日	東京大学	セミナー	(第4回セミナー) 禁じられた啓蒙: 問-東アジア比較の視点から再読する李光洙『無情』	橋本悟氏(シカゴ大学Society of Fellows)
17	平成26年12月18日	東京大学	セミナー	(第5回セミナー) 日本の前で中国を演じる近世琉球—大英図書館蔵『琉球奏楽図』を巡って	Patrick SCHWEMMER氏(Ph. D candidate, Princeton University)
18	平成27年1月8日	東京大学	セミナー	(第6回セミナー) Knowledge is a Polyglot: Japan and China in the Global Competition for Terminologies	Thorsten J. Pattberg 訪問研究員(東京大学東洋文化研究所)
19	平成27年1月15日	東京大学	セミナー	(第7回セミナー) Diary of a Poor Bannerman: Surviving Day-to-Day in Qing Beijing in the Early Nineteenth Century	Bingyu Zheng氏(Princeton University)
20	平成27年1月22日	東京大学	セミナー	(第8回セミナー) Shinran's Hope in the Age of Mappo/末法における親鸞の希望	ダンラップ梨佳訪問研究員(東洋文化研究所)
21	平成27年5月21日	東京大学	セミナー	(第9回セミナー) 三木清の成熟した政治論—マルクス主義、リベラリズム、ナショナリズムを越えた共同主義的統合	健・中田・ステフエンセン訪問研究員(ユニバーシティ・カレッジ・ヨーク, 哲学科・アイルランド国立研究委員会マリ・スクウォッドフスカ=キュリー研究員/東洋文化研究所)
22	平成27年5月28日	東京大学	セミナー	(第10回セミナー) 服を着せる/アイデンティティを飾る—植民地台湾の日本人を例に	李如玲氏(日本学術振興会外国人特別研究員)
23	平成27年6月4日	東京大学	セミナー	(第11回セミナー) 抵抗の再思考—竹内好の「魯迅」と近代アジアの問い	ヴィレン・ムーティアー アシスタント・プロフェッサー(ウィスコンシン大学マディソン校)
24	平成27年6月25日	東京大学	セミナー	(第12回セミナー) 国家として振る舞う—日本と台湾における外国人労働者政策の政治性	コンラド・カリツキ氏(ブリティッシュコロロンビア大学博士課程)
25	平成27年11月12日	東京大学	セミナー	(第13回セミナー) 第一次世界大戦下の海事政策—日本の戦時船舶管理令を事例に	イライジャ・グリーンスタイン訪問研究員(東洋文化研究所)
26	平成27年12月3日	東京大学	セミナー	(第14回セミナー) 20世紀日本の多様な近世	ミハエル・ハチウス研究員(ベルリン自由大学歴史学研究所グローバルヒストリー科)
27	平成27年12月10日	東京大学	セミナー	(第15回セミナー) 「虚実」の系譜—明治日本における「文学」の構築	後藤雅氏(プリンストン大学東アジア学科博士課程)
28	平成27年12月17日	東京大学	セミナー	(第16回セミナー) 日本の軍事的南進と植民地臣民の動員—1937年-45年の台湾を事例に	白根晴治助教授(ニューヨーク市立大学歴史学部)
29	平成28年1月28日	東京大学	セミナー	(第17回セミナー) Nature as Symbol of Japan: The Meiji Kachoga of Taki Katei	Rosina Buckland, Senior Curator (National Museum of Scotland)
30	平成28年3月3日	東京大学	セミナー	(第18回セミナー) 平家物語の語る災異と記憶の場—安元の大火(1177)を中心に	林かおる氏(プリンストン大学東アジア研究科博士課程)

31	平成27年3月30日	シカゴ大学	ワークショップ	東京大学とシカゴ大学における日本研究	
32	平成27年10月9日	シカゴ大学	ワークショップ	東京大学とシカゴ大学の共同ワークショップ	

〔5. フランス社会科学高等研究院及びハーバードYenching Instituteとの教員交流プログラム（平成25年度～）〕

（教員の交流）

フランス社会科学高等研究院	派遣	平成26年度 安富歩教授 平成27年3月7日～4月6日
		平成27年度 張馨元助教 平成28年2月3日～3月4日
	受入	平成26年度 Xavier Paules准教授 平成26年11月20日～12月20日
		平成27年度 Larissa Zakharova准教授 平成27年7月7日～8月5日
ハーバードYenching Institute	派遣	平成25年度 名和克郎教授 平成25年8月21日～平成26年5月10日 平成25年5月23日～平成26年6月30日
		平成26年度 青山和佳准教授 平成26年4月28日～平成26年8月23日
		平成26年度 黒田明伸教授 平成26年8月11日～平成27年7月24日

〔6. プリンストン大学との共同研究・教育プロジェクト（平成25年度～）〕

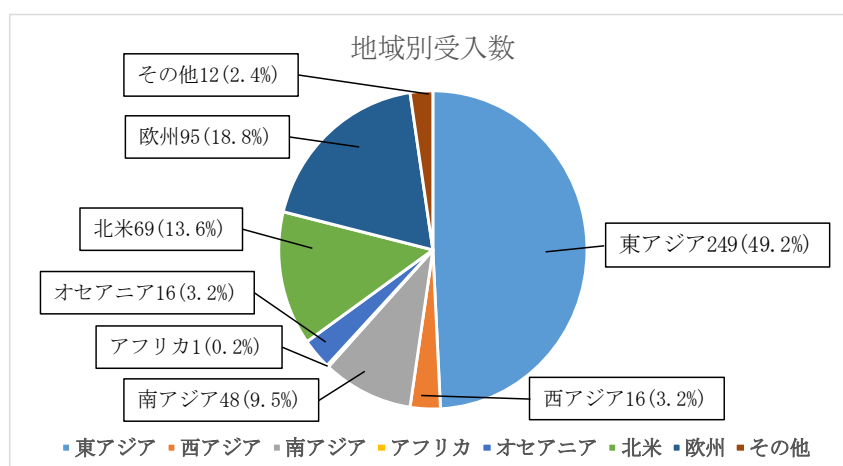
プロジェクト名	Toward Immersive Asian Studies: A Collaborative Undergraduate Exchange Program for the UTokyo-Princeton Partnership ※平成25年度に「東京大学-プリンストン大学共同研究・教育プロジェクト」として採択		
学生交流	派遣	平成27年2月12日-3月28日 東京大学-プリンストン大学学部学生交流プログラム 5名	
		平成28年1月27日-3月18日 東京大学-プリンストン大学学部学生交流プログラム 5名	
	受入	平成27年6月22日-8月3日 学部学生交流プログラム 5名 ※サマースクール:War, Memory, and Identity in Asia:A Summer Research Program at the University of Tokyo 2015 参加者総数13名（プリンストン大学5名、東京大学8名）	
教員派遣	3ヶ月以上長期派遣：平成25年度 佐藤仁教授 平成26年2月11日～平成26年6月11日 平成26年度 井戸特任助教 平成27年2月6日～平成27年5月20日 平成27年度 中島隆博教授 平成27年8月29日～平成27年12月25日		

〔7. チリ・カトリカ大学との「グローバル・アジア学」プロジェクト（平成25年度～）〕

（学術研究集会等の開催）

	開催日	開催場所	種別	学術集会名
1	平成25年11月7日-8日	カトリカ大学	ワークショップ	アジア研究の最前線 ※東大フォーラムの一環として実施
2	平成26年10月6日-9日	東京大学	ワークショップ	Chile-Japan Academic Forum at Utokyo
3	平成27年11月2日-6日	カトリカ大学	講演他	カトリカ大学アジア研究センターとの交流

<資料 18-10>外国人研究員の受入状況



[地域別受入数] (単位：人)

	東アジア	西アジア	南アジア	アフリカ	オセアニア	北米	欧州	その他	合計
受入数	249	16	48	1	16	69	95	12	506
割合 (%)	49.2%	3.2%	9.5%	0.2%	3.2%	13.6%	18.8%	2.4%	100.0%

*その他：海外の研究機関に属する日本国籍を有する者

[年度別受入数] (単位：人)

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計
受入数	63	89	91	80	105	78	506

(3) 研究集会の開催状況、及び論文・著書等の研究業績の状況

国際共同プロジェクトと共に、所内教員が学内外の多数の研究協力者（年平均約 318 名、うち学外約 236 名）と共同研究を行う班研究プロジェクト（年平均約 31 件）を推進し（資料 18-11、18-12）、両プロジェクトの研究成果を発表する研究集会（東文研セミナー・シンポジウム等）の開催件数を、第 1 期末と比べて著しく増加させた（第 1 期末 49 件→第 2 期平均約 89 件、資料 18-13、18-20 P18-19、別添資料 18-1）。

第 2 期の教員（平均 35 名）の研究業績総数は 927 点（著作 136 点、論文 514 点、その他 277 点）、一人あたり年平均約 4.41 点で、第 1 期末（約 4.08 点）と同じく高い水準を維持した。そのうち外国語業績数は 190 点（英語 129 点、中国語 48 点、その他 13 点）、年平均約 31.66 点で、第 1 期末（24 点）と比較して積極的に海外に発信した（資料 18-14）。また、本研究所では東洋文化研究所叢刊 7 点、紀要別冊 3 点、紀要 12 点、雑誌『東洋文化』6 点、その他 40 点を刊行するなど、研究集会と併せて研究成果の積極的発信に取り組んだ（資料 18-15）。

<資料 18-11>班研究プロジェクトの参加者数

(各年度 5 月 1 日現在)

年 度	班数 (件)	所内 (人)	学内 (人)	学外 (人)	計 (人)
平成 22 年度	35	72	44	260	376
平成 23 年度	36	76	46	261	383
平成 24 年度	27	44	24	227	295
平成 25 年度	28	37	23	220	280
平成 26 年度	32	39	23	231	293
平成 27 年度	30	37	23	222	282
合 計	188	305	183	1,421	1,909
年 平 均	31	50	30	236	318

<資料 18-12>班研究プロジェクトの具体的研究例（平成 27 年度）

班番号	班の名称	所内 教員	研究協力者		計
			学内	学外	
P-1	南アジア北部における人類学的研究の再検討	1	0	12	13
P-2	アジアの貧困と不平等の再検討	2	0	7	9
P-3	アジアの食文化と開発と地域	4	2	2	8
P-4	中台関係の総合的研究	1	1	11	13
P-5	アジアにおける多言語状況と言語政策史の比較研究	1	3	2	6
P-6	東アジアの安全保障研究	1	0	5	6
E1-1	中国法研究における固有法史研究、近代法史研究及び現代法研究の総合の試み	1	1	14	16
E1-2	魂の脱植民地化?合理的な神秘主義?	1	0	14	15
E1-3	中国古代文献の成立に関する多角的研究	1	2	7	10
E2-1	現存する中国絵画の包括的再検討	2	0	9	11
E2-2	仏教美術に関する資料収集と比較研究	3	0	8	11
E2-3	中国学における概念マップの再構築	2	2	13	17
S-1	ミャンマー近現代史における「国」と「民」	1	0	4	5
S-2	南アジア農村社会の歴史的研究	2	0	9	11
S-3	東南アジア近現代史像の再検討	1	3	8	12
S-4	中国禅宗語録の研究	1	0	10	11
S-5	上座部文献の研究	1	1	6	8
W-1	都市社会と宗教施設	3	1	7	11
W-2	中東の社会変容と思想運動	2	0	12	14
W-3	イスラーム思想の文献学的研究	1	3	9	13
W-4	ペルシア語文化圏研究	1	1	10	12
W-5	イスラーム美術の諸相	1	0	8	9
W-6	比較歴史学の課題と方法	1	1	7	9
N-1	東アジアにおける「民俗学」の方法的課題	1	1	9	11
C-1	中国出土文字史料とその歴史的背景	1	1	14	16
個別課題	中国における経済的ナショナリズムの系譜	0	0	1	1
個別課題	16-19世紀における遠隔地商業環境と中国の社会経済構造に関する研究	0	0	1	1
個別課題	近代東アジア音楽史の相互関連性の探究ー音声記録を手がかりに	0	0	1	1
個別課題	中国古代テキスト研究と西欧のフィロロギーー18世紀日本の文献学的・書誌学的学問方法の比較研究ー	0	0	1	1
個別課題	弘一法師（李叔同）と日本：近代における日中文化・仏教交流の一例として	0	0	1	1
合計（のべ人数）		37	23	222	282

<資料 18-13>東文研セミナー・シンポジウム等の研究集会開催状況

(単位：件)

区 分	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
シンポジウム	14	6	10	7	10	12	14
講演会・セミナー	26	47	47	47	49	86	77
研究会・ワークショップ	9	11	17	17	25	32	22
合計	49	64	74	71	84	130	113

* 第 2 期中の開催総数：536 件、年平均：約 89 件

<資料 18-14> 所員の研究業績数と使用言語

年度	研究者数	著作数*	論文数	その他*	合計	一人あたり平均
平成 21 年度	37	17	102	32	151	4.08
平成 22 年度	36	15	99	27	141	3.91
平成 23 年度	37	16	91	26	133	3.59
平成 24 年度	34	27	85	57	169	4.97
平成 25 年度	32	26	78	62	166	5.18
平成 26 年度	35	29	78	49	156	4.45
平成 27 年度	36	23	83	56	162	4.50
第 2 期合計	210	136	514	277	927	
当該 6 年間平均	35	22.6	85.6	46.1	154.4	4.41

* 研究者数には在任期間 1 年未満の教員を含まない。「著作」は共編著、翻訳書、「その他」は書評、研究抄録、事典項目を含む。

* 上記業績の内、下記が外国語研究業績数と使用言語

年度	英語	中国語	韓国語	ベトナム語	ペルシャ語	フランス語	計
平成 21 年度	14	9	0	0	0	1	24
平成 22 年度	15	8	2	0	1	0	26
平成 23 年度	13	7	1	0	1	0	22
平成 24 年度	23	10	1	0	0	0	34
平成 25 年度	27	9	2	0	1	0	39
平成 26 年度	22	8	1	0	0	0	31
平成 27 年度	29	6	2	1	0	0	38
第 2 期合計	129	48	9	1	3	0	190
当該 6 年間平均	21.5	8.0	1.5	0.16	0.5	0	31.66

(出典：東洋文化研究所業績データベース、平成 28 年 3 月 31 日現在)

<資料 18-15> 本研究所の成果刊行物一覧

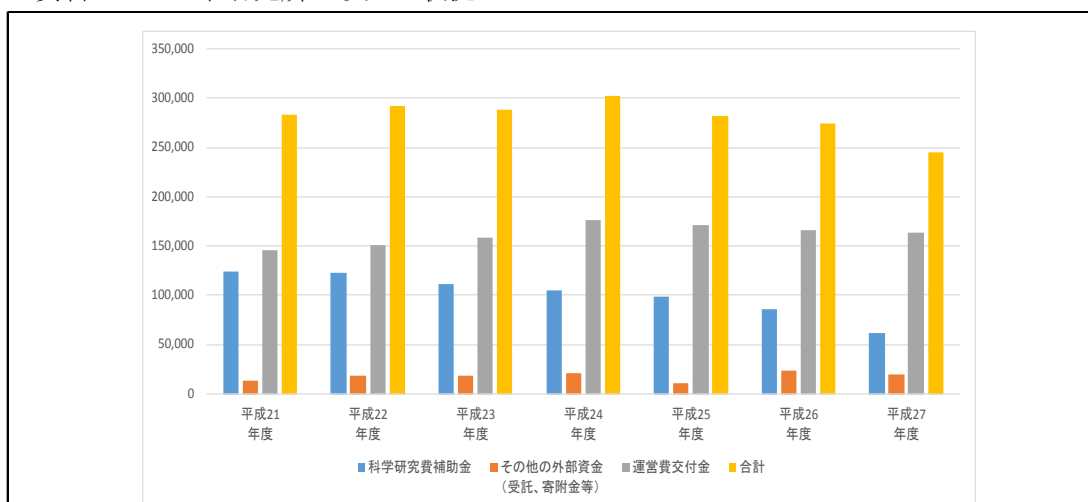
平成22年度～平成27年度						
No	種 別	巻号等	著者・編者	タ イ ト ル	出版社	刊行年
1	東洋文化研究所要覧	2010-2012 (4冊)	東洋文化研究所	『東洋文化研究所要覧』日本語版及び英語版	—	平成22～ 24年
2	東洋文化研究所紀要	第158冊 -第169冊 (12冊)	東洋文化研究所	『東洋文化研究所紀要』	—	平成22～ 28年
3	紀要別冊		松井健	『西南アジアの砂漠文化』	人文書院	平成23年
4	紀要別冊		平勢隆郎	『「八紘」とは何か』	汲古書院	平成24年
5	紀要別冊		長澤榮治	『アラブ革命の遺産』：エジプトのユダヤ系マルクス主義者とシオニズム	平凡社	平成24年
6	東洋文化研究所叢刊	第24輯	安富歩	『黄土高原・緑を紡ぎだす人々：「緑聖」朱序弼をめぐる動きと語り』	風響社	平成22年
7	東洋文化研究所叢刊	第25輯	松井健	『グローバルゼーションとく生きる世界>：生業からみた人類学的現在』	昭和堂	平成23年
8	東洋文化研究所叢刊	第26輯	鈴木董 編著	『オスマン帝国史の諸相』	山川出版社	平成24年
9	東洋文化研究所叢刊	第27輯	長澤榮治	『エジプトの自画像：ナイルの思想と地域研究』	平凡社	平成25年
10	東洋文化研究所叢刊	第28輯	安田佳代	『国際政治のなかの国際保健事業：国際連盟保健機関から世界保健機関、ユニセフへ』	ミネルバ書房	平成26年
11	東洋文化研究所叢刊	第29輯	卯田宗平	『鵜飼いと現代中国：人と動物、国家のエスのグラフィック』	東京大学出版会	平成26年
12	東洋文化研究所叢刊	第30輯	羽田正	『グローバルヒストリーと東アジア史』	東京大学出版会	平成28年
13	雑誌『東洋文化』	第91号	東洋文化研究所	『東洋文化-特集 オスマン帝国史の諸問題』	なるにあ	平成23年
14	雑誌『東洋文化』	第92号	東洋文化研究所	『東洋文化-特集 魂の脱植民地化(3)-「呪縛」からの脱却・「箱」の外に出る勇気』	なるにあ	平成24年
15	雑誌『東洋文化』	第93号	東洋文化研究所	『東洋文化-特集 民俗学の新しい分野に向けて』	なるにあ	平成24年
16	雑誌『東洋文化』	第94号	東洋文化研究所	『東洋文化-特集 繁栄と自立のディレンマ-ポスト民主化台湾の国際政治経済学』	なるにあ	平成26年
17	雑誌『東洋文化』	第95号	東洋文化研究所	『東洋文化-特集 魂の脱植民地化(4)-異界から立ち上がる秩序』	なるにあ	平成27年
18	雑誌『東洋文化』	第96号	東洋文化研究所	『Relationship between Tantric and Non-Tantric Doctrines in Late Indian Buddhism』	なるにあ	平成28年
19	英文雑誌	Vol. 7-2 -Vol. 13-1 (12冊)	Institute for Advanced Studies on Asia	International Journal of Asian Studies (IJAS)	Cambridge U.P.	平成22～ 28年
20	東アジア部門美術研究分野報告		東アジア部門美術研究分野	『中国繪畫總合圖録 第三編』第一巻 アメリカ・カナダ篇 1	東京大学出版会	平成25年
21	東アジア部門美術研究分野報告		東アジア部門美術研究分野	『中国繪畫總合圖録 第三編』第一巻 アメリカ・カナダ篇 2	東京大学出版会	平成26年
22	東洋学研究情報センター叢刊	第13輯	大野のり子	『黄土地上に上った日本人 --中国山西省 三光政策村的記憶--』	—	平成23年
23	東洋学研究情報センター叢刊	第14輯	園田茂人	『勃興する東アジアの中産階級 アジア比較社会研究のフロンティアⅠ』	勁草書房	平成24年
24	東洋学研究情報センター叢刊	第15輯	名和克郎	『東京大学東洋文化研究所蔵 社団法人日本ネパール協会旧蔵資料目録』	—	平成25年
25	東洋学研究情報センター叢刊	第16輯	園田茂人	『リスクの中の東アジア アジア比較社会研究のフロンティアⅡ』	勁草書房	平成25年
26	東洋学研究情報センター叢刊	第17輯	平勢隆郎・塩沢裕仁・関紀子・野久保雅嗣	『東方文化学院旧蔵建築写真目録』	—	平成26年
27	東洋学研究情報センター叢刊	第18輯	田良島哲・平勢隆郎・三輪柴都香	『東京国立博物館蔵 竹島卓一旧蔵「中国史跡写真」目録』	—	平成27年
28	東洋学研究情報センター叢刊	第19輯	園田茂人	『連携と離反の東アジア アジア比較社会研究のフロンティアⅢ』	勁草書房	平成27年
29	東洋学研究情報センター叢刊	第20輯	赤迫照子	『廣島大學文學部舊蔵漢籍目録』	—	平成28年
30	東洋学研究情報センター叢刊	第21輯	大野のり子	『黄土地上に上った日本人 [续] --中国山西省 三光政策村的記憶--』	—	平成28年
31	ニューズレター	No. 24 -No. 35 (12冊)	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター	『明日の東洋学』	—	平成22～ 28年
32	その他		東洋文化研究所図書編	『はじめての漢籍』	汲古書院	平成23年

*刊行年欄の平成28年は平成28年1～3月(平成27年度)中に刊行したものを掲載。

(4) 収入の状況

第2期の年平均収入は、280,862千円で、第1期末の収入(282,749千円)とほぼ同水準を維持した(資料18-16)。外部資金獲得に積極的に取り組み、科研費の採択件数と教員の取得率は、第1期末に比べ増加した(第1期末17件、45.9%→第2期平均約22.7件、64.8%)。また科研費の採択率は第1期末と比べ減少したが(第1期末89.5%→第2期74.6%)、全国平均(約50%)、国立大学平均(約54%)、本学平均(約63%)を大きく上回る高い水準を維持した(資料18-17)。

<資料18-16>本研究所の収入の状況



(単位: 千円)

経費区分等	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	第2期年平均
科学研究費補助金	123,640	122,998	112,020	104,640	99,100	85,753	61,822	97,722
その他の外部資金 (受託、寄附金等)	13,742	18,806	18,080	20,924	10,663	23,039	20,127	18,607
運営費交付金	145,367	150,500	158,742	176,525	171,849	166,256	163,326	164,533
合計	282,749	292,304	288,842	302,089	281,612	275,048	245,275	280,862

<資料18-17>本研究所の科研費の取得率と採択率

(科学研究費補助金〔新規及び継続〕)

区分	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	H22-27年度
研究者数	37	36	37	34	32	35	36	35
申請(件)	19	29	30	30	28	31	35	30.5
採択(件)	17	24	23	21	21	24	23	22.7
取得率(%)	45.9%	66.7%	62.2%	61.8%	65.6%	68.6%	63.9%	64.8%
採択率(%)	89.5%	82.8%	76.7%	70.0%	75.0%	77.4%	65.7%	74.6%
全国平均	40.9%	44.9%	49.3%	51.7%	51.0%	50.6%	50.0%	49.6%
国立大学	44.6%	49.0%	53.5%	56.4%	55.0%	54.3%	53.4%	53.6%
東京大学	57.3%	60.1%	64.2%	66.9%	64.1%	60.6%	60.6%	62.8%

*平成26,27年度の東大採択率は以下の出典の「研究者が所属する研究機関別 採択件数・配分額一覧(平成26,27年度)」を基に作成

(出典: 日本学術振興会科学研究費補助金研究機関別配分状況一覧)

東京大学東洋文化研究所 分析項目 I

(5) 資料の保存と公開、およびアウトリーチ活動等の状況

アジア研究者の利用に供する蔵書は 68 万冊に上り、第 2 期では年平均約 5200 冊を増加させた（資料 18-18）。また公開講座を平成 27 年度より増加させ、高校生のための講義、図書館等実務担当者向けの漢籍整理長期研修、図書室講演会を開催するなど（資料 18-19）、アジアの知の発信機能を強化し、アウトリーチ活動を充実させた。

<資料 18-18> 本研究所の蔵書受け入れ数

年度	受け入れ 冊数	うち 購入分	年度	受け入れ 冊数	うち 購入分
平成 22 年度	4,911	3,432	平成 25 年度	7,063	3,656
平成 23 年度	5,105	3,407	平成 26 年度	4,103	2,481
平成 24 年度	6,060	2,823	平成 27 年度	3,983	1,977
合 計		31,225	年 平 均		5,204

<資料 18-19> 本研究所のアウトリーチ活動

[公開講座]

年度	テーマ	講師数	参加人数
平成 22 年度	アジアの奇	3	293
平成 23 年度	アジアの覚	2	177
平成 24 年度	アジアの文	2	103
平成 25 年度	アジアの流	2	98
平成 26 年度	アジアの眼	2	105
平成 27 年度夏	アジアを知れば世界が見える	3	100
平成 27 年度秋	アジアの和	2	112

[高校生のためのオープンキャンパス]

開催年度	来場者数	開催年度	来場者数
平成 22 年度	260	平成 25 年度	354
平成 23 年度	※震災のため中止	平成 26 年度	570
平成 24 年度	230	平成 27 年度	362

[高校生のための講義（東大の研究室をのぞいてみよう！）]

開催日	講義名	参加人数
平成 25 年 8 月 7 日午後	アジアの経済と文化	7
平成 25 年 12 月 21 日午前	「正義とは何か?」、「平等とは何か?」及び「所得格差」について	11
平成 25 年 12 月 21 日午後	「平等とは何か?」及び「公正」について	14
平成 26 年 8 月 7 日午後	アジアの格差と貧困	6
平成 28 年 3 月 29 日午後	アジアの格差と貧困	7

[漢籍整理長期研修]

年度	参加人数	開催期間	
		前期	後期
平成 22 年度	9	6 月 14 日～6 月 18 日	9 月 6 日～9 月 10 日
平成 23 年度	11	6 月 13 日～6 月 17 日	9 月 5 日～9 月 9 日
平成 24 年度	8	6 月 4 日～6 月 8 日	9 月 3 日～9 月 7 日
平成 25 年度	10	6 月 10 日～6 月 14 日	9 月 2 日～9 月 6 日
平成 26 年度	9	6 月 9 日～6 月 13 日	9 月 8 日～9 月 12 日
平成 27 年度	10	6 月 8 日～6 月 12 日	9 月 7 日～9 月 11 日

[図書室講演会]

開催日	講演題目	講師数	参加人数
平成 22 年 6 月 9 日	はじめての漢籍 その二	3	91
平成 23 年 11 月 9 日	言語、文字、書くものと書かれるもの	3	57

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

本研究所は、研究の国際化に対応する組織・制度改革を行うことによって、国際連携を強化し（協定更新・新規締結数：第 1 期末 11 件→第 2 期 17 件、資料 18-7 P18-6、資料 18-20）、国際共同プロジェクトを飛躍的に充実させた（第 1 期末 2 件→第 2 期 7 件、第 1 期末比 3.5 倍増、資料 18-8 P18-6、資料 18-9 P18-7、資料 18-20）。その結果、第 2 期に本研究所は、世界のアジア研究者が集結する国際的ハブ拠点として大きく成長した（外国人研究員数：第 1 期 293 人→第 2 期 506 人、第 1 期比約 1.7 倍増、資料 18-10 P18-13、資料 18-20）。さらに、国際シンポジウムを含む研究集会開催数（第 1 期末 49 件→第 2 期平均約 89 件、第 1 期末比約 1.8 倍増、資料 18-13 P18-14、資料 18-20、別添資料 18-1）や外国語業績数（第 1 期 24 点→第 2 期平均約 31.66 点、資料 18-14 P18-15）、科研費取得率（第 1 期末 45.9%→第 2 期 64.8%、資料 18-17 P18-17）を増加させ、教員の一人あたり平均研究業績数を高水準に維持し（第 1 期末約 4.08 点→第 2 期平均約 4.41 点、資料 18-14）、資料の収集・公開や、アウトリーチ活動（資料 18-19）に積極的に取り組むなど、研究活動の諸点において第 1 期末から大きな向上が見られた。所定の目標を達成し、また想定する関係者のニーズに十全に応えており、本研究所に期待される水準を上回っている。

<資料 18-20> 第 2 期の特筆すべき向上点

事 項	第 1 期	⇒	第 2 期	伸び率
(1) 交流協定締結件数 (件)	11		17	155%
(2) 国際共同プロジェクト実施件数 (件)	2		7	350%
(3) 外国人研究員の受入状況 (人)	293		506	173%
(4) 若手研究者 (学振PD/外特) の育成 (人)	9		17	189%
(5) 研究集会の開催状況 (件)	49		89	182%
(6) 学術賞受賞数 (件)	7		11	157%

* (4) 及び (5) については第 1 期最終年度 (平成 21 年度) と第 2 期の平均値との比較

観点 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

第2期に本研究所は附属東洋学研究情報センターを、新規に共同利用・共同研究拠点化(平成22年度)し、アジア関係資料・データベース等の整備、公開や、学内外の研究者との資料に関する共同研究を行うことにより、アジア研究の基礎的インフラを提供し、アジア研究の発展に貢献した。基盤形成的な「機関推進プロジェクト」を32課題、応用的な「公募研究プロジェクト」を14課題採択し、学内外の研究者との共同研究を推進した(資料18-21)。それらの研究成果は、東洋学研究情報センター叢刊として刊行されている(資料18-15 P18-16)。

所蔵資料を学外博物館の展示などの利用に供し(資料18-22)、またアジア各地の貴重文献大型コレクション、世界屈指の中国絵画写真アーカイブなど、計22件35種のデータベースを維持、管理しており、当該6年間には4件5種のデータベースを新規作成、公開した(資料18-23)。それらは国内外から非常に多くのアクセスがあり、特にデータベース「貴重漢籍善本全文画像」は、第2期中に9,577万件を超える利用件数を記録した(資料18-24)。さらに本センターは拠点化以後、機関推進・公募研究プロジェクト関連の研究集会開催数(平成22年度6件→平成27年度24件)、それへの参加者数(平成22年度20人→平成27年度651人)、参加外国人研究者数(平成22年度0人→平成27年度122人)を飛躍的に増加させるなど(資料18-25)、共同利用・共同研究を頗る活発化させた結果、平成27年度の期末評価で「貴重な研究資料に関する情報発信とその利用に焦点を当ててアジア研究を推進しており、外国機関からの受け入れを含めて共同利用・共同研究者が増加している」、「研究者を対象としたシンポジウムが増加している」点が評価されている。

＜資料18-21＞本研究所の東洋学研究情報センタープロジェクト一覧

〔機関推進プロジェクト〕			
番号	分野	プロジェクト名	年度
1	造形	イスラーム美術・建築作品の画像・情報アーカイブ	H22-H25
2	文献	アラビア文字圏ポリグロット・グロッサリー・プロジェクト	H22
3	文献	古典一次資料上における知識DB構築支援の試み	H22
4	造形	アジア美術画像アーカイブ(第2期)	H22
5	造形	東文研蔵貴重物品の整理とデジタル化	H22
6	社会情報	日本とアジアを繋ぐ：アジア駐在経験をもつ日本人ビジネスマンのライフヒストリー	H22
7	文献	漢籍知識庫の構築と国際共同運用への試み	H22-H24
8	文献	台湾現代史貴重史料の収集・整理	H22-H24
9	文献	日ネ協会旧蔵資料データベース構築	H22-H24
10	造形	東アジア絵画デジタル・アーカイブ・プロジェクト	H22-H24
11	文献、社会情報	社会生態史学のためのデータベース構築	H22-H24
12	文献	エジプト議会議事録データベースの改訂	H23
13	文献	アラビア文字圏ポリグロット・グロッサリー・プロジェクト	H23
14	造形	アジア美術画像アーカイブ(第3期)	H23-H24
15	社会情報	アジアバロメーターによる先導的アジア比較研究の刊行事業	H23-H24
16	造形	東文研蔵貴重物品の整理とデジタル化	H24
17	文献	中華圏現代史貴重史料の収集・整理	H25
18	文献	日ネ協会旧蔵資料データベース拡充	H25
19	造形	東アジア美術デジタル・アーカイブ・プロジェクト	H25
20	造形	東文研蔵貴重物品の整理とデジタル化	H25
21	社会情報	アジア学生調査第2波調査の実施	H25
22	社会情報	日本政治・国際関係データベース	H25
23	文献、社会情報	日本政治・国際関係データベースプロジェクト	H26
24	文献	日ネ協会旧蔵資料データベース整備	H26
25	文献、造形、社会情報	富山妙子画伯コレクションー第三世界とNarrative Art-	H26
26	文献	中華圏現代史貴重史料の収集・整理	H26-H27
27	造形	東アジア美術アーカイブ・プロジェクト	H26-H27
28	社会情報	アジア学生調査統合データの作成と利用	H26-H27
29	文献、社会情報	中国における省別、企業別食糧貿易資料の収集と整理	H26-H27
30	文献	日ネ協会旧蔵資料データベース最終調整	H27
31	文献、社会情報	日本政治・国際関係データベースプロジェクト	H27
32	文献	ラジャプザーデ文書コレクションの研究	H27

〔公募研究プロジェクト〕		
番号	プロジェクト名	年度
1	アジアの工芸の〈現在〉 工芸の人類学の基礎研究	H22-H23
2	国際的な米価高騰とインドシナ半島の稲作の変容に関する農業経済史	H22-H23
3	関野貞による東アジア文化財写真の整理と分析	H23-H24
4	新しいアジア像構築の試み：アジア・パロメーターの再分析プロジェクト	H23-H24
5	日本漢籍集散の文化史的研究－「図書寮文庫」を対象とする通時的蔵書研究の試み－	H24-H25
6	チベット美術の情報プラットフォームの構築と公開	H24-H25
7	関野貞・竹島卓一による中国史跡調査写真に関する基礎的研究	H25
8	政治的リスクと人の移動：中国大国化をめぐる国際共同研究	H25-H26
9	中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究－泉涌寺流を中心とした宋代仏教の相対化への試み	H26-H27
10	日本所在漢籍に見える東アジア典籍流伝の歴史的研究－宮内庁書陵部蔵漢籍の伝来調査を中心として－	H26-H27
11	広島大学文学部旧蔵漢籍目録作成のための研究	H26-H27
12	関野貞・竹島卓一による中国史跡調査写真に関する史料学的研究	H26
13	学生の意識変化にみるアジアの近未来：アジア学生調査統合データ分析プロジェクト	H27
14	歴史都市デリーの都市開発と遺跡保存－東京大学インド史跡調査団の再評価からの中世インド建築史	H27

<資料 18-22>所蔵資料の貸し出し状況

貸出期間	貸出先	貸出物品等
平成23年10月29日 -12月4日	徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 特別陳列「鳥居龍蔵が見た北東アジア」	東方文化学院旧蔵写真資料鳥居龍蔵撮影分84点を展示
平成24年3月1日 -6月22日	総合研究博物館 特別展示「アルケオメトリアー考古遺物・美術工芸品を科学の眼で透かし見る」	「Shell Mounds of Omori」 by E. S. Morse, Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan. Volume I, Part I (1879)
平成24年4月28日 -7月16日	龍谷大学龍谷ミュージアム 特別展「仏教の来た道-シルクロード探検の旅」	コータン壁画など9点を出陳
平成24年7月28日 -9月23日	横浜ユーラシア文化館 企画展「モンゴルシベリアを歩く」	オロンスム遺跡出土資料4点を出陳、東方文化学院旧蔵写真資料6点を写真パネル・図録・チラシ等掲載
平成25年4月27日 -6月30日	横浜ユーラシア文化館 特別展「マルコ・ポーロが見たユーラシアー『東方見聞録』の世界」	「重修揚州府志」等
平成25年10月5日 -12月15日	大倉集古館 特別展示「描かれた都－開封・杭州・京都・江戸」	「咸淳臨安志六卷」等 6点
平成26年1月30日 -8月1日	福岡アジア美術館、府中市美術館、兵庫県立美術館 東京・ソウル・台北・長春－官展にみる近代美術	「満洲國美術展覧會圖録 第1回」
平成28年3月12日 -6月26日	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館「フランツ・エッケルト没後100周年記念特別展 近代アジアの音楽指導者エッケルト：プロイセンの山奥から東京・ソウルへ」	「東明：時事週報」(写真パネル展示)
平成28年3月18日 -3月22日	東京大学附属図書館アジア研究図書館 上廣倫理財団寄付研究部門「つながる・史料と研究」東洋学・中国学若手研究者のための合宿ワークショップ	「高宗純皇帝実録 第19冊」等 7点

<資料 18-23>第2期のデータベースの新規作成・公開

件 名	
1	関野貞大陸調査と現在
2	東京国立博物館所蔵 木挽町狩野による中国絵画模本目録
3	中国絵画所在情報 谷文晁派（写山楼）粉本・模本資料データベース
4	倉石武四郎博士講義ノート デジタルアーカイブス
5	『CARD：ヒンドゥー儀礼研究のための基礎資料』／永ノ尾研究室

<資料 18-24>主なデータベース

データベース名	蓄積情報の概要				公開方法			
1 日本政治・国際関係データベース	戦後日本の政治や国際関係についてのデータベース。重要文献、演説、出来事、略語等を調べることができる。順次情報を公開、平成26年公開。				HPで公開			
蓄積量／利用・提供状況	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計	
蓄積量（文書）	5,134	5,694	6,384	6,702	7,138	7,383	38,435	
蓄積量（年表）	233,962	233,962	233,962	233,962	233,962	233,962	1,403,772	
利用件数	1,979,040	1,494,970	1,496,476	1,719,656	1,670,187	1,772,923	10,133,252	
2 インド史跡調査データベース	1960年代初頭に東京大学インド史跡調査団が行ったデリーを中心としたインドのイスラーム建築の写真、図面、拓本等の資料をデジタル化し、都市別、建物別に公開している。				HPで公開 ※H22, 23利用件数はトップページアクセス件数			
蓄積量／利用・提供状況	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計	
蓄積量	9,449	9,449	9,449	9,449	9,449	9,449	56,694	
利用件数	4,419	1,968	1,543,743	1,330,591	1,059,804	1,235,603	5,176,128	
3 貴重漢籍善本全文画像	約11万冊に及ぶ所蔵漢籍があり文化財としての漢籍善本の保存とともに、多くの研究者の研究に資するため。				HPで公開			
蓄積量／利用・提供状況	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計	
蓄積量	104,949	104,949	104,949	104,949	104,949	104,949	629,694	
利用件数	15,809,462	12,165,180	17,425,531	13,572,454	22,144,327	14,654,564	95,771,518	
4 アラビア語写本ダイバーコレクション	イスラーム史料写本を電子化した全内容をオリジナルカタログと合わせて閲覧できる。				HPで公開 利用件数はトップページアクセス件数			
蓄積量／利用・提供状況	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計	
蓄積量	63,035	63,035	63,035	63,035	63,035	63,035	378,210	
利用件数	2,709	2,309	2,379	2,680	3,425	3,722	17,224	
5 中国絵画所在情報データベース	国内外の中国絵画コレクションの悉皆調査を継続的に行ってきた。				HPで公開			
蓄積量／利用・提供状況	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計	
蓄積量	22,381	22,696	23,896	23,911	23,931	23,931	140,746	
利用件数	53,891	46,742	43,903	40,198	39,879	34,607	259,220	

<資料 18-25> 東洋学研究情報センター関連の研究集会及び参加者数

(開催状況)

区 分	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
シンポジウム	0	0	2	0	8	6
講演会・セミナー	0	1	0	2	11	5
研究会・ワークショップ	6	10	9	12	4	13
合計	6	11	11	14	23	24

(参加者数)

区 分	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
参加者数	20	46	93	416	836	651
うち外国人研究者数	0	1	3	89	227	122

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

本センターは、第2期に新規に共同利用・共同研究拠点とされ、機能強化されたことにより、学内外の人文科学・社会科学のアジア研究者や研究機関、博物館などの公共機関や報道機関、そして一般市民などのアジア理解に資する文献や資料、データを蓄積、拡充、公開してその利用に供し、またそれらを活用した共同研究を積極的に推進するなど、想定する関係者のニーズに十全に応じており、期待される水準を上回っている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

<p>観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)</p>
--

(観点に係る状況)

本研究所では、第2期において国内外の学術賞を受賞した優れた研究が増加し(第1期7件→第2期11件、資料18-20、18-26)、アジアに関する人文学・社会科学において顕著な成果を上げた。人文学の分野では、羽田正がグローバル・ヒストリーに関する世界的研究者ネットワークを構築し、その研究をリードしている。これは従来にない新しい世界史解釈と叙述の方法を提案する革新的な研究で、国際的に大きな反響を呼んでいる(第16回アジア太平洋出版協会出版賞学術書部門銀賞、第4回ファーラービー国際賞)(研究業績説明書業績番号〔以下「業績」〕5)。また中島隆博は国家と宗教という二つの共同性を越えた共生思想を、中国哲学と西洋哲学という世界的視野でとらえ直す挑戦的な研究を行い(第25回和辻哲郎文化賞、業績3)、馬場紀寿はパーリ語、サンスクリット語、漢語、チベット語の資料を網羅的に検討するという、世界的に見ても画期的な上座部仏教史の研究を行った(第53回日本印度学仏教学会賞、業績4)。社会科学の分野では、松田康博が冷戦終焉後に激変を続ける東アジア地域の国際政治について、文献の丹念な解読とインタビューを実証的に重ねた先駆的研究を行った(第7回中曽根康弘賞優秀賞、業績6)。さらに東洋学研究情報センターにおいて園田茂人は、アジア地域の大規模社会調査データベースを構築し、それに基づいて革新的なアジア比較研究を牽引しており、国際学会で高く評価されるとともに(F. Hilary Conroy Award)、そのデータは海外の大学でも注目され研究・教育で利用されている(業績2)。

上記のように学術的意義を有するのみならず、さらに社会、経済、文化的意義を併せもつ研究も本研究所では展開されている。アジアの資源をめぐる国家・社会関係に着目した佐藤仁の傑出した国際協力研究は、数々の賞を受賞し(第28回大同生命地域研究奨励賞、国際開発学会奨励賞、第10回日本学術振興会賞、第10回日本学士院学術奨励賞)、その独創的な研究は「従来のこの分野における業績として一頭地を抜いて」(学士院学術奨励賞選考理由)いると学術的に高く評価されるとともに、さらにその成果は外務省 ODA 評価主任(平成23~25、27年)、中・東欧地域環境センター日本代表理事(平成22~25年)などの活動を通じて、今日の日本の政策に反映されている(業績1)。また、田中明彦の長年にわたる世界システム研究や、現代東アジアの国際政治の分析は高く評価され(紫綬褒章)、種々の公的な政策懇談会で社会還元されている。同研究で構築された東洋学研究情報センターのデータベース「日本政治・国際関係データベース」は第2期中に1,013万件を超す利用件数を記録し、学術利用のみならず教育現場やマスコミでも積極的に利用され、近現代の社会や政治を論ずる際の基本ツールとして高く評価されており、本研究所の活動の社会貢献を示す好例である(資料18-24 P18-22、業績7)。

＜資料 18-26＞学術賞受賞一覧

- 羽田正 第16回アジア太平洋出版協会出版賞学術書部門銀賞
(主催: アジア太平洋出版協会(APPA)) 平成22年
- 羽田正 第4回ファーラービー国際賞(主催: イラン・イスラム共和国) 平成22年
- 中島隆博 第25回和辻哲郎文化賞(学術部門)(主催: 兵庫県姫路市) 平成25年
- 馬場紀寿 第53回日本印度学仏教学会賞(主催: 日本印度学仏教学会) 平成22年度
- 松田康博 第7回中曾根康弘賞優秀賞(主催: 世界平和研究所) 平成23年
- 佐藤仁 第28回大同生命地域研究奨励賞(主催: 大同生命国際文化基金) 平成25年度
- 佐藤仁 国際開発学会奨励賞(主催: 国際開発学会) 平成25年
- 佐藤仁 第10回日本学術振興会賞(主催: 日本学術振興会) 平成25年度
- 佐藤仁 第10回日本学士院学術奨励賞(主催: 日本学士院) 平成25年度
- 田中明彦 紫綬褒章(春) 平成24年
- 園田茂人 F. Hilary Conroy Award(主催: Association for Asian Studies) 平成23年

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

国内外の学術賞受賞数増加(第1期7件→第2期11件、第1期末比約1.6倍増、資料18-20 P18-19、資料18-26)に見られるように、第2期は第1期と比較して高く評価される優れた研究を大幅に増加させ、国内外のアジア研究者に先端的な研究領域・研究視角を提供している。研究成果の社会還元にも熱心で、公共部門の政策立案に大きく貢献するなど大きな向上が見られており(業績1、7)、これらは本研究所に期待される水準を上回るものである。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

本研究所は、「徹底した大学改革と教育研究の国際化を全学的に推進し、国際協力関係を醸成して、我が国の世界的存在感を高め、ひいては国際競争力を強化する」という本学の第2期中期目標に鑑み、第1期末の組織と制度を国際的観点から改革した。定員配置換えや学内支援による定員増によって、国際公募で人材を集める新世代アジア研究部門を新設し、国際学術交流室を強化した（資料18-3 P18-3）。このような改革の結果、国際学術交流（協定数：第1期11件→第2期17件、資料18-7 P18-6、資料18-20 P18-19）や海外有力大学との国際共同研究プロジェクトが飛躍的に拡大した（第1期末2件→第2期7件、第1期末比3.5倍増、資料18-8 P18-6、資料18-9 P18-7、資料18-20）。また国際的人材が数多く集結し（外国人研究員数：第1期293人→第2期506人、第1期比約1.7倍増、海外著名客員教授の招へい数：第1期0人→第2期4人、資料18-5 P18-5、資料18-10 P18-13、資料18-20）、国際シンポジウムを含む研究集会開催件数（第1期末49件→第2期平均約89件、第1期末比約1.8倍増、資料18-13 P18-14、資料18-20、別添資料18-1）や外国語業績数（第1期24点→第2期平均約31.66点、資料18-14 P18-15）を顕著に増加させるなど、「国際的ハブ拠点として世界の研究者をつなぐ」という本研究所の研究目的に照らして、質を大きく向上させた。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

本研究所は第1期末と比較し、国内外で高い評価を受けた優れたアジア研究を大幅に増加させており（学術賞受賞数：第1期7件→第2期11件、第1期末比約1.6倍増、資料18-20、18-26）、「アジアに関する高度な総合的研究を行う」という本研究所の研究目的に照らして質の大きな向上があった。またそれらの研究は、関連分野において革新的な視点と手法、内容を生み出しており、「新しい研究領域を開拓する」という本研究所の研究目的に照らした質の大きな向上にも大きく貢献している。特に第2期に開始した、世界の著名研究機関と協働する「新しい世界史/グローバル・ヒストリーに関する国際的なネットワーク型研究教育拠点」（日本側代表者・羽田正教授、日本学術振興会研究拠点形成事業、資料18-8、18-9、18-27）での研究は、新しい世界史理解とその叙述の方法的検討という革新的テーマに取り組み、その研究体制を整備することにより、当該分野の新しい研究領域を開拓することに成功し、国際的に高く評価されている（業績5）。

<資料18-27>新しい世界史/グローバル・ヒストリーに関する国際的なネットワーク型研究教育拠点（Global History Collaborative）のイメージ図

